山行報告書

受 付 No.	３６４	登山地・ルート	~~甲斐駒ケ岳～鋸岳より~~　鋸岳
目　　的	ルートファインディング能力を高める		
メンバー	大山、坂野		
行動記録			

月　日　曜	天候	ポイント地点・所要タイム
1・28・土	晴れ	浜松＝戸台山荘Ⓟ～角兵衛沢～岩小屋 8:06　11:19　15:08
1・29・日	晴れ	岩小屋～角兵衛沢のｺﾙ～第１高点～第３高点～大ｷﾞｬｯﾌﾟのｺﾙ 6:50　10:36　11:48　14:25　17:17
1・30・月	晴れ	大ｷﾞｬｯﾌﾟのｺﾙ～第２高点～中ノ川乗越～戸台川～戸台山荘Ⓟ＝浜松 7:09　8:22　8:54　12:09　14:54

記事　　目的の成否・状況・問題点(反省)・メンバーの状況・ルートの注意点・自然状況

【1 日目】前週の南岸低気圧による降雪がどのくらいあったかが気になったが、橋本山荘までは問題なく行けた。しかし、そこから先の上り坂道に除雪がないものの轍があったので行ってみるが、二駆ではやはり登れず、坂の途中でﾁｪｰﾝを巻く。後続の車を１台待たせてしまった。河原に下りると登れなくなりそうなので、戸台山荘の入り口の端に停めさせていただく。河原の駐車場には数台の車があり、戸台川沿いの道にはﾄﾚｰｽがついていたが、角兵衛沢の分岐の標識の所は通っていなかったため熊穴沢分岐の標識まで行ってしまい少し戻る。対岸の取付にはﾋﾟﾝｸのﾃｰﾌﾟがあり、そこから先も間断なくﾃｰﾌﾟがあってちゃんと見ていけば迷う心配はない。逆に、ﾃｰﾌﾟがなかったら大変かも。雪は締まりがなく、傾斜が出てくると雪の下の凍った地面で滑るようになってきたのでｱｲｾﾞﾝを着ける。坂野氏が先に行くとあっという間に間が開き、しかもこちらから主張しないと１時間超えても休憩しないのでなかなか大変。どんな体力してるのだ…。大岩壁が見えてくると岩小屋は顕著ですぐわかった。ﾊﾝｸﾞ下の平地で快適だが、落石も多く転がっており、しかしﾊﾝｸﾞの外に出れば上の岩壁からの落石も恐いし、無事を祈りつつﾃﾝﾄを設営する。

【2 日目】落石もなく快適な夜だった。岩壁の基部に沿って沢を上って行く。膝くらいのﾗｯｾﾙとなるが、締まらない雪で下の岩にｱｲｾﾞﾝが当たるとﾊﾞﾗﾝｽが悪い。ｶﾞｲﾄﾞ本にﾗｯｾﾙならばｺﾙまで３時間とあったがそれ以上にかかった。ｺﾙからは終始坂野氏が先行してﾗｯｾﾙして行ったが、ｾｶﾝﾄﾞでも追いつけず、というか言い訳すればｾｶﾝﾄﾞもそれなりに大変で、無理せず自分のﾍﾟｰｽで進む。１ﾋﾟｯﾁ強で第１高点。小ｷﾞｬｯﾌﾟへは鎖の支点に付いていた残置ｽﾘﾝｸﾞで懸垂する。小ｷﾞｬｯﾌﾟからは雪で覆われたﾙﾝｾﾞ状を登る。鎖があったが、雪の下はどうもｽﾗﾌﾞらしくｱｲｾﾞﾝがかからない。鎖に頼り雪の下を必死でｽﾀﾝｽを探し、右の草付に逃げて何とか登る。ここが一番怖かった。そこから尾根に上がり、細い岩稜を渡って鹿窓に向けて斜面をﾄﾗﾊﾞｰｽするのだが不安なのでﾛｰﾌﾟを出した。鹿窓はくぐらずそのまま尾根に直上し第３高点へ。坂野氏はさっさと下りて行ってしまい、自分は写真など撮っていたらまた間が空いてしまった。ﾄﾚｰｽを追って行くが、ｶﾞｲﾄﾞ本には「左に下りてﾊﾞﾝﾄﾞをﾄﾗﾊﾞｰｽ」と記載されてたのを思い、こんなに下りて大丈夫かなと思ってるとﾃｰﾌﾟが導いていた。懸垂の支点と残置ﾛｰﾌﾟがある箇所に来るが坂野氏の姿がない。下に声をかけると返事あり。しかし自分は残置ﾛｰﾌﾟを使う気になれず、ﾛｰﾌﾟを出して懸垂をする。懸垂しながら、坂野氏はこんな垂直に近い所をどうやって下りたんだろうと思う(後から聞いたところによると、最初は手で持って下り、下の方は残置ﾛｰﾌﾟで懸垂したとのこと)。ﾛｰﾌﾟ末端が見えてきた頃、１ﾋﾟｯﾁでは下りられないことに気付き支点を探すがこれといったものがなく、末端ぎりぎりの所で何とか支点になりそうな木に捨て縄を巻いてもう１ﾋﾟｯﾁ下りる。大ｷﾞｬｯﾌﾟのｺﾙよりは少し下の谷の中に下りた。坂野氏はｺﾙに向けてﾗｯｾﾙを始めていた。ﾛｰﾌﾟを回収してｻﾞｯｸに詰める時、中の荷物を２つ出してｻﾞｯｸと自分の間に挟んだ。ﾛｰﾌﾟを入れて戻そうとした時、そのうちの１つの赤いｽﾀｯﾌﾊﾞｯｸﾞがないことに気付く。あれ？まさか？と思い振り向くと、遥か下の谷のｶｰﾌﾞをｽﾀｯﾌﾊﾞｯｸﾞが滑って曲がっていくところだった。あの中には何が入っていたっけ…と一瞬考えてはっとする。財布、携帯、…車の鍵！上に向かった坂野氏のことが少しよぎったが、取りあえず声をかけて説明するより追

いかけてしまった。ほとんど手ぶらで、どこまで落ちて行くかわからない物を追うのは無謀という自覚はあったが、それ以外選択肢がなかった。狭い谷だが雪は締まっていて雪崩の心配は感じなかった。でも所どころ膝上まで雪に足を取られながら、物が滑りやすそうな雪面と谷の傾斜に絶望的な感じもする。どのくらい下りたか、見覚えのある物が落ちていて、中身が出てしまっていることに気付く。少し傾斜の落ちた所でやっとｽﾀｯﾌﾊﾞｯｸﾞを回収する。財布とﾗｼﾞｵは確認したが、車の鍵がない。どうしよう…と思っているうちにふと気付いた。車の鍵はｻﾞｯｸの雨蓋の中だった。とりあえず安心して他に落ちているものがないか確認しながら上り返すと携帯も回収できた。ﾅｲﾌとか歯磨きｾｯﾄとかは紛失。まだ先は長いな、と思っていると音がして何か落ちてきた。見るとｻﾞｯｸの中に入っているはずの物が…。混乱しつつもｻﾞｯｸが倒れて中の物が落ちているらしいという最悪の状況を悟る。やがて落ちたｻﾞｯｸが見えてきて、その傍に坂野氏もいた。状況を聞くと、自分の様子を見に下りた坂野氏が落とした雪がｻﾞｯｸを直撃し、ものすごいｽﾋﾟｰﾄﾞで滑り落ちて行ったらしい。物はほぼ回収してくれてあり、その上、上り返すにあたりｻﾞｯｸを背負ってくれた。これは本当に助かった。坂野氏が測ったところによると標高差で 80mくらいだったらしい。自分が下りた分を足して大体 100m弱くらいの標高差を落ちていったと思われる。そこから上り返すにあたっては自分が先に行ってﾄﾚｰｽを作るが、荷重の違いからあまり役には立たなかったようだ。ｺﾙまで上り返して 17 時過ぎ。ここでﾋﾞﾊﾞｰｸしかないがﾃﾝﾄを張るｽﾍﾟｰｽは確保できず、ｺﾙの少し下を削り、ﾃﾝﾄをｼｰﾄとして前に垂らして谷からの風を防ぐ。反対側の戸台側からはすごい風の音が聞こえたが、こちら側はほとんど風もなく静かで、舞った雪が上から落ちてくるのを除けばﾃﾝﾄの中とほぼ変わらないくらいだった。ただ横になるｽﾍﾟｰｽはないので、谷にずり落ちないよう気をつけつつ、ひと晩膝を曲げて座った状態で過ごした。

【3 日目】天気が崩れなくてよかった。昨日ﾃﾝﾄの中でもﾌﾟﾗﾃｨﾊﾟｽの水を凍らせてしまったので、昨夜はﾃﾙﾓｽ以外、水の作り置きはせず、朝から水づくり。温かいものをしっかり食べて撤収する。ｺﾙから戸台側へ下りて行くが、雪は腿まで埋まる。岩壁の基部に沿ってﾄﾗﾊﾞｰｽして支尾根に乗り第 2 高点へ。そこから中ノ川乗越へ下る。雪の下の岩にｱｲｾﾞﾝが当たってﾊﾞﾗﾝｽが悪い。乗越でｱｲｾﾞﾝを外し熊穴沢を下る。ここも雪の下に浮石が隠れているという最悪の沢で、何度も転んだ。ﾄﾚｰｽはなかったが、ﾃｰﾌﾟがこちらも間断なくありﾙｰﾄの心配はない。樹林帯に入っても雪の下の凍った地面で何度もｺｹながらやっとのことで戸台川に出る。あとは来た道を戻り、河原の駐車場から戸台山荘までの最後の上りがきつかった。

【反省】下山後、右足指が軽度の凍傷で腫れてしまった。原因としては、大ｷﾞｬｯﾌﾟのｺﾙでのﾋﾞﾊﾞｰｸの際に靴を緩めずに膝を曲げた同じ姿勢をひと晩とり続けたことだと思う。ひと晩中足先が冷たく、かかとの上げ下げをしたり指を動かしたりしていたけれど、靴を緩めることに関しては「ｽﾊﾟｯﾂを取るのが面倒くさい」と思って緩めなかったのを認識している。荷物を落としたことは不注意以外の何物でもないが、物を落とした後の行動は、坂野氏の姿が見えなくてもひと言伝えて行くべきだったろうと反省している。物を追うかどうかというそもそもの問題もあるが、今回は見つかって結果ｵｰﾗｲとなったが、滅多にないこととはいえ、車の鍵はそれぞれが持たなくてはいけないのかな、と思った。

紙面不足の場合は裏面へ

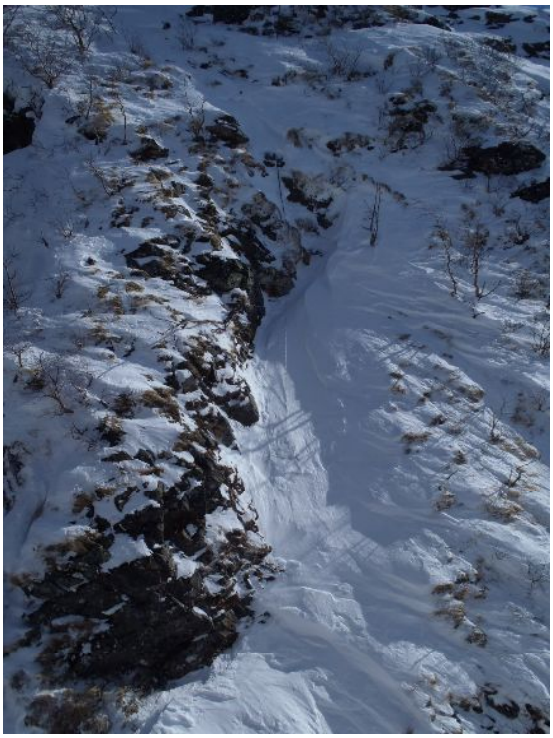
報告者	大山	受付	平成　　年　　月　　日	受付者	

第一高点を目指す

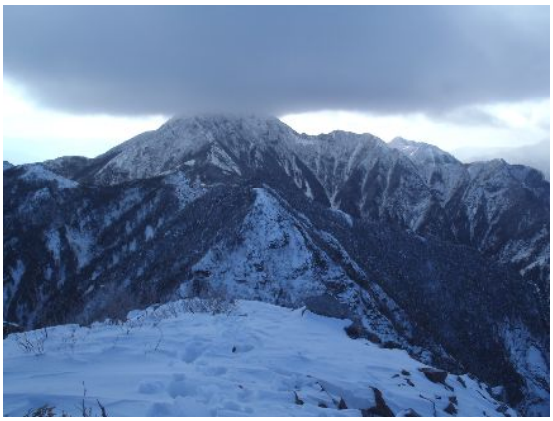
第三高点と、奥に第二高点

甲斐駒までの入り組んだ尾根

ビバークした所



真ん中の凹角が悪すぎた



甲斐駒は遠かった…